

山中 まどさんは、山中の家に奥様と何度か見えたことがありました。奥様が積極的な方で、まどさんはそばで、にこにこされている方でしたね。ちょうど私も幼児を抱えています。子どもの言葉の面白さに気づき、子どもと一緒に歌ったり作ったりもしていました。

親戚になったことで、まどさんから詩集やレコードなどをいただいで児童文学に興味を持つようになり、それまで入っていた高田敏子先生の「野火の会」をやめて、日本児童文学者協会の文学学校に入りました。

間中 文学学校は何期でしたか。

山中 八期でした。

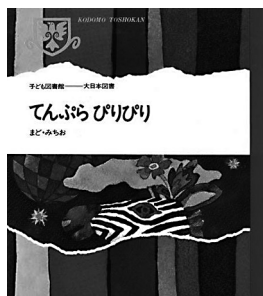
海沼 まどさんとは行き来なさったんですか。

山中 子どもと作った手作り詩集などをお送りして、よくお返事のお葉書を書きました。義父のように作品を書いて訪ねていくことは遠慮していました。鶴見正夫先生の西荻の会では何度か、また関根栄一先生の会などでもお目にかかっていますね。

海沼 間中さんは、まど・みちお作品との最初の出会いはいつ頃でしたか。

間中 詩集『てんぶらびりびり』が出版された時、私は東京学芸大学の児童文学研究部「あかべこ」に入ったばかりで、二一歳だったんですね。その『てんぶらびりびり』を買って本棚に大事にしまっておいたんです。ほかに、サトウハチローの詩も好きで、ハチローの『おかあさん』と『てんぶらびりびり』の二冊が本棚に入っていました。詩は中学の時から書いていましたが、大学時代、あまり作品を書いてなかつたのです。卒業して日比茂樹さん、皿海達哉さんが立ち上げた同人誌「牛」に入れてもらいましたけれど、いわゆる少年詩は書いてはいませんでした。

三五歳過ぎてから、まど・みちおやサトウハチローの詩を読み直し、少年詩を書いてみようと思ったんです。



海沼 今、お二人の方から詩集『てんぶらびりびり』との出会いが児童文学を書くきっかけになったということをお聞きしました。実は、私が都立高校に勤めていた頃ですが、初めて担任を持った時、クラスの生徒が大事そうに本を抱えて来て「先生、この本読みましたか」といって見せてくれたのが『てんぶらびりびり』だったんです。杉田豊の色彩豊かな絵の表紙で、読んでみて驚きました。ルナールの『博物誌』や三好達治の四行詩を思わせるような詩で、一度で惹きつけられてしまいました。それまでは室生犀星、萩原朔太郎、高村光太郎の近代詩、吉野弘、谷川俊太郎の現代詩ですから。まど作品をプリントにし授業で使いましたけれど、生徒の評判は良かったですね。その意味では、私が児童文学に興味を持つようになったのも、まど・みちおの詩集との出会いからだったと思います。

間中さんは小学校の教員の時に、まど・みちおの作品を教材として多く扱ったと聞きますが。

間中 理論社のテーマ別のシリーズを副教材としてよく使いました。「うさぎさんがきてね／おなまえ つけてと／い